一江戸ゟ板橋江二里半　本駄賃百七文　から尻賃六拾七文　人足賃五拾貳文

日光海道宿々二割增之覺

一江戸ゟ千住江二里八町　本駄賃百五文　から尻賃六拾六文　人足賃五拾文

一江戸ゟ岩淵江三里拾五町　本駄賃百五拾四文　から尻賃百四文　人足賃七拾四文

甲州海道宿々二割增之覺

一江戸ゟ上高井戸江四里拾三町　本駄賃百七十八文　から尻賃百九文　人足賃八拾六文

當年道中就困窮、右之通駄賃人足賃も增候間、當酉三月十五日ゟ同十月晦日迄、如書面取之、十一月朔日ゟ八、延寶三年卯正月、可爲相定通候、以上、

三月

〔江戸砂子五下〕品川。　東海道御傳馬宿、日本橋より二里、北本宿、南本宿、歩行新宿南北二ケ村、凡千石の場、

里人の云、南北宿の境川を品川といふと、一說に、武藏國品川の驛は、往古此奈革を染たる所なりと、訓閱集曰、武藏國大渡庄にて四名革を染るとあり、甲冑を威に齒朶革を用ゆ、當所にて染たる革か、源平盛衰記に、源頼政品川縅の鎧を著たりとあり、品川にて染たるゆへ、品革といふにや、地名と前後分明ならず、今立合といふ所いにしへ玄な革を染たる所といひつたふよし、里人の語ぬ、いづれ分明なることを玄らず、猶たづぬべし、

〔南向茶話〕問曰、芝邊品川筋之儀に聞及も候はれける事も候哉、承度候、

答曰、〇中略品川の號、或古老の物語に、元下無川と云り、子細は、此前川海岸に近く、川下直に海に入るゆへ也と、此說慥ならず存候に、近頃俳諧人齋藤德元、寛永五年冬、京都より關東下向の紀行の內に云、加の川、此町の中に橋のかゝれる川あり、水上のなき川なればとて上無川と號す、かむ川